

『小町業平歌問答』続考

——新出『歌品問答』の紹介——

吉海 直人

〔要旨〕前稿（同志社女子大学日本語日本文学18）で『小町業

平歌問答』の伝本を紹介したが、本稿はその続編である。『小町業平歌問答』が『四十二の物あらしひ』のパロディとして成立していることを、その構成と題の類似からあらためて論じてみた。また新出『歌品問答』（C系統本）は、書名からして従来ものとは相違しており、加えて業平と小町が歌問答に至る過程を序として有している点、非常に興味深い伝本と思われるので、その全文を翻刻・紹介し、私に考察を加えてみた。

〔キーワード〕小町業平歌問答・歌品問答・四十二の物あらし

ひ

一、『四十二の物あらしひ』との関連

以前、『小町業平歌問答』の写本二点を紹介した際¹⁾、市古貞次氏『中世小説の研究』（東京大学出版会・昭和30年）の中に、ほかに業平との歌問答を記したものに「小町業平歌問答」

〔在原業平小野小町物争ひ三十二首〕がある。

在原業平小野小町に是を尋て曰

春のあしたと秋の夕べといづれ

小町答

天の原長岡（閑）にかすむ朝より風の身にしむ秋
の夕暮

といふやうに、業平の間に小町が歌を以て答へたものである。これまた成立年代が明かでないが、後述「四十二の物あらしひ」等と同じ系列に属する戯作で、やはり中世であ

らうか。

(114頁)

とあることを紹介していたにもかかわらず、肝心の『四十二の物あらそひ』については、一切言及しなかった。しかしながら『小町業平歌問答』の成立を考える上で、『四十二の物あらそひ』を避けて通ることはできないことがわかった。そこであらためて両者の比較を行ってみた。

まず『四十二の物あらそひ』の和歌の題を一覧してみよう。

- 1 春と秋と
- 2 月の夜と雪の朝と
- 3 にし山とひがしの山と
- 4 しぐれと松かせと
- 5 ころもうつをとと夜ふねこぐと
- 6 やまひにくすりを得たるとこひしき人にあへると
- 7 かせになみよる柳と露にしほるるすすきと
- 8 おぎとはぎと
- 9 てとうたと
- 10 かひおほひとてまりと
- 11 うぐひすとほととぎすと
- 12 うとまるる身とあかぬわかれと
- 13 あか月の恋と夕べのおもひと
- 14 えだに色こきもみじと
- 15 淋しき庭の落葉と
- 16 みめのよきとありかのあると
- 17 花と紅葉と
- 18 たのめてとはぬ夕暮とかへるあしたのなごりと
- 19 うらみあると思へど叶はぬと
- 20 菊と梅と
- 21 みねにさけぶさると鹿のなくねと
- 22 みねにわかるるよこ雲ととふさとのけふりと
- 23 ゆめと文と

- 24 いはねの木々と軒のしのぶと
- 25 上陽人が恨と玉昭君が悲しみと
- 26 しうとめとままははと
- 27 塩焼の翁とつりするあまと
- 28 女郎花となでしこと
- 29 雲のかりとみぎはのをしと
- 30 逢てあはぬ恋とひたすら逢ざる恋と
- 31 ふじとやまぶきと
- 32 卯の花とつばきと
- 33 伊勢と加茂と
- 34 やはたと熊野と
- 35 らいさんとせっぽうと
- 36 みめよくしなたかき上らうのよもぎがむぐらにとちられて浅ましくすたれてなぐさむものとはくわんげんをしようたをよみて日を暮たへがたからんと又としより老たる翁のせにのうへにたはらによりよりかかりておきながものこそわがものよとわななきふるはんと
- 37 同じ心
- 38 源氏の女三の宮かしは木の右衛門の文をしとねの下よりみなられてあさましきと又うきふねの兵部卿の御事をかほる大将にしられ奉りてすへの松やまとかきつかはされたりしところと
- 39 おぼろ月夜の内侍のかみにこうきでむのほそ殿にて逢そめし源氏のころとおちばの宮に夕霧の大将のをのにて見そめしわりなさは
- 40 手のよからんと詞のたらひたらんと
- 41 恋とすがたと
- 42 柏木のゑもんのかみのむなしくなりしおもひと有明の大将の山ふかき悲しさと

後半には『源氏物語』の人物評が加えられているので、題が異常に長くなっているものがある。一見して二つのうちのどちらがいかという問いになっていることがわかる。だから「物あらそひ」なのである。これを『小町業平歌問答』と比較してみると、

28 「女郎花となでしこ」(四) ↓ 9 「撫子と女郎花」(小)

が一致していることがわかった。その他にも、

1 「春と秋と」(四) ↓ 1 「春の朝と秋の夕と」(小)

2 「月の夜と雪の朝」(四)

↓ 31 「月の夜と雪の明ほの」(小)

5 「ころもうつをとと夜ふねこぐ」(四)

↓ 30 「暁の礎と夜舟漕音」(小)

7 「かぜになみよる柳と露にしほるるすすき」(四)

↓ 4 「風に靡く青柳と露にしほるゝ薄」(小)

15 「みめとしほ」(四) ↓ 11 「みめはよふて塩なからんと

みめはわろくて愛のあらん」(小)

17 「花と紅葉」(四)

↓ 3 「嵐山の花盛ともみじ流るゝ大井川」(小)

などは、かなり類似しているのではないだろうか。

もちろん『四十二の物あらそひ』の本文にも、伝本によってかなりの異同が存するようだが、それにしても誰かが題(優劣)を出してそれに歌で答えるという形式を含めて、『小町業平歌問答』が『四十二の物あらそひ』の構成を模倣していることは明白であろう³⁾。要するに『四十二の物あらそひ』の影響を受けて『小町業平歌問答』が成立したという流れが想定されるわけである。そのため市古氏は、「在原業平小野小町物争ひ三十二首」という表現をも提示しておられる。今後、こういった方面の研究が進展することを期待したい。

二、新出伝本『歌品問答』の紹介

続いて新しく入手した伝本について紹介したい。これは書名が『歌品問答』(国書総目録には見当たらない)とだけあって、書名からでは『小町業平歌問答』とは判断できそうもない。前回の『小町少将競歌』も含めて、内容の確認作業が必要であろう。それだけでなく冒頭は、

一歳在原の業ひら都をいて、紀の路なる玉津しまもふての時、小町も跡より追いかせの今社歌に君居寺布曳の松をこ

姦情をかけて一すしに思ひかへさぬ片男浪同しく御殿に参籠侍りぬ。

云々と道行き風の文章が続いている。その後、『小町業平歌問答』が展開するという体裁になっている。この序文は、今まで知られている伝本には見当たらないようであるから、なおさら紛らわしい。この点が、書名と合わせて本書の最大の特徴ということになりそうである。今後、こういった序文を有する伝本が発見されることを待ちたい。

なお本書には全部で三十二首が所収されているので、完全揃いと見てよさそうである。所収歌を一覧してみたところ、前稿で提起した「稀に逢ふ」歌と「浦遠み」歌が両方とも含まれているので、便宜的にはC系統の本ということになる（『小町少将競歌』と同系統）。ただし本書には、

思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

歌が見当たらず、代わりに、

なからへて思わぬ人にそはんより恋はしぬともあかぬ別れ路

歌が含まれている。また問答の順番も大きく異なっており、同

系統の『小町少将競歌』ともかなり相違していることがわかった。どうやら諸本による差異は大きいようである。という以上にこれだけの伝本では、未だ諸本分類が確定していないといった方が妥当であろうか。

ここで新出『歌品問答』の書誌を簡単に紹介しておきたい。影月堂文庫所蔵。書名は表紙の左上に直書きで『歌品問答』と記されている（本文と同筆）。表紙は仮綴になっている（本文共紙）。上側と下側に破損あり。寸法はタテ29.5 cm×ヨコ19.3 cmとかなり大きい。丁数は表紙を含めて全十四丁。表紙の裏は白紙であるが、最終十四丁目はウラに「歌品問答終」と記されている。料紙は楮紙。一面五行書き。近世の書道手本のように大振りの字で丁寧に書かれている。書写年代は近世中後期頃であろうか（もう少し古くも見える）。

きちんと書かれてはいるものの、明らかな誤写と思われる点も認められる。たとえば28番の歌の下の句は「なをし涙の妻と成すらん」とあるが、「なをし」は「をなし（同じ）」の誤写であろう。また9番の歌の上の句は「おみなへしなにいとめて、思ひとも」とあるが、「思ひとも」は「思ふとも」あるいは「思へども」とあるべきであろう。ついでながら下の句の「実

に「げに」と読むか、あるいは「色に」とあった方がわかりやすい。また20番の歌の上の句も「是もまた人の形見と思ひとも」とある。これも「思ふとも」「思へども」とあるべきであろう。あるいは「思ひとも」という用法が存するのかもしれない。

なお本書には同筆と思われる振り仮名が付けられている。それは、

5 「流石」・17 「谷」・26 「待宵」

の三つであるが、「流石」以外は振り仮名を付ける必要は認められそうもない。むしろ1 「長閑」には「のどか」、3 「佛」には「おもかげ」、6 「太山」には「みやま」、7 「款冬」には「やまぶき」、14 「薰(物)」には「たきもの」、15 「空焼」には「そらだき」、29 「通夜」(終夜)には「よもすがら」、30 「礎」には「きぬた」、32 「衝」には「ちどり」という振り仮名を付きたい。もう一つ、17 「棄人」には「よすてひ」という振り仮名が認められるが、それを白粉のようなもので上から塗り消している。

また13の歌の下の句「たゞひとり子のみあぢきな身や」は字余りになっている。参考までに『小町少将競歌』を調べたと

ころ、「たゞひとりのみあぢきな身や」となっていた。そうすると「子」が不要ということになる。

本書には以上のような書写上の問題が認められるので、必ずしも善本とは認定しがたい。

結

以上、本稿では『小町業平歌問答』が『四十二の物あらそひ』のパロディとして成立していること、そして新出『歌品問答』が特有の序を有していることを中心に論じてみた。これで多少は研究史を進展させることができたはずである。

しかしながらまだまだ情報不足であり、もう少し伝本をたくさん集めて総合的に検討しなければ、書名・諸本系統をはじめとして、その内包する問題の解決は望めそうもない。恐らくもっとたくさんさんの伝本が存するであろうから、その発見・報告と合わせて今後の研究の進展を待ちたい。

〔注〕

〔翻刻〕『歌品問答』

(1) 吉海直人「新出『小町業平歌問答』二点の紹介と翻刻」同

志社女子大学日本語日本文学18・平成18年6月。

(2) 底本は便宜的に『続群書類従三十三上』(続群書類従完成

会)を使用。本作品に関しては、真下美弥子氏「御伽草子

『四十二のものあらそひ』考」国語と国文学62-9・昭和60
年9月が参考になる。ただし本書が女子教育に直結している

かどうかは疑わしい。なお『四十二のものあらそひ』には多

くの伝本が存するが、題や詠歌がかなり相違しているので、

本文異同の中の類似も認められる。

(3) 『四十二のものあらそひ』と類似した作品としては、『源

氏物あらそひ』と『十番の物あらそひ』の二点が指摘されて

いる。すると本書は三点目の作品ということになる。なお

『四十二のものあらそひ』には絵本も存するが、『小町業平歌

問答』の絵本は今のところ報告されていない。

歌品問答」(1才)

一歳在原の業ひら都をいて、紀の路なる玉津しまもふての時、

小町も跡より追いかせの今社歌に君居寺布曳の松をこゑ情をか

けて一」(2才) すしに思ひかへさぬ片男浪同しく御殿に参籠

侍りぬ。業ひら小町にとふていわく、

1 春の朝と秋の夕といつれ

小町答へてかくなん」(2ウ)

天の原長閑に霞む朝より／風の身にしむ秋の夕暮

2 梅の匂ひと橘の香といつれ

思ひわかす花たち花の袖の香も／むかし忘れぬ梅の匂ひも」

(3才)

3 嵐山の花盛ともみぢ流るゝ大井川といつれ

紅葉河流るゝ秋のけしきより／あらしの山の花の佛

4 風に靡く青柳と露に」(3ウ) しほるゝ薄といつれ

をく露にしほるゝ野辺の薄より／いとやさしきは春の青柳

5 散花の別れと有明の名残と何れ」(4才)

風に散る花の別れに比れば／流石さすがつれなき有明の月

6 桜狩と野遊ひといつれ

桜狩心もまよふ太山より／千種の花にまじる野遊ひ」(4ウ)

7 款冬と白菊といつれ

しら菊のうつらふ色のつらきより／中くいわしやまふきの花

8 卯の花と秋萩といつれ

布晒す卯の花かきを見んよりも」(5オ)／錦をりしく庭の萩原

9 撫子と女郎花といつれ

おみなへしなにいとめて、思ひとも／実にはゆかりのいもかな
てしこ

10 葛の葉と忍ふ草といつれ」(5ウ)

思はずもしのふ心の色を見む／うらみの深き葛の葉よりも

11 みめはよふて塩なからんとみめはわろくて愛のあらんといつ
れ」(6オ)

うつしほの人にはいかで添はてん／愛たにあらはみめわろくと
も

12 契は有て宵に別れんとちきりはなふて語り明さんといつれ」

(6ウ)

契り有と宵にはいかで別れまし／只手枕にかたり明さむ

13 老て子のなからんと若きときひとりあらんといつれ

老か身の子のなきよりもかなしきは」(7オ)／た、ひとり子の
みあぢきな身や

14 薫の匂ひくると琴の音の聞ゆるといつれ

空焼は床しけれとも琴の音の／聞ゆるかたに曳こゝろかな」

(7ウ)

15 逢ぬ思ひと忘らるゝうらみといつれ

逢ぬこそ頼は残れ忘らるゝ／うらみを誰に語り明さん

16 歌は詠て物かゝぬと物は書て歌詠ぬといつれ」(8オ)

浜千鳥跡たにあらは和歌浦／迷はん人の心ならばや

17 棄人の峯の庵とうき世をそむく谷の戸といつれ

世を捨る心は同じみちなれと」(8ウ)／嶺の庵より谷の通路

18 思ふ人に別れんとにくき人にそはんといつれ
なからへて思わぬ人にそはんより／恋はしぬともあかぬ別れ路」

(9オ)

19 恋しき方の物語とむかしを見る夢といつれ

古しへに帰る夢より他所なから／思ふあまりを語る言の葉

20 移香とかたみといつれ」(9ウ)

是もまた人の形見と思ひとも／猶なつかしき袖の移香

21 朝夕立そひなから逢ぬと見る事はなふて稀に逢ふといつれ

稀に逢ふ嬉しきよりもうきはたゝ」(10オ)／うち添なから解ぬ
下紐

22 板屋のあられと草庵の雨といつれ

草の庵雨よりも猶板ひさし／もらぬあられや袖ぬらすらん」
(10ウ)

23 床しきかたの玉章とふみ迷ふ道のしるへといつれ

踏まよふ道のしるへの嬉しきも／其玉つさを見る程はなし

24 旅寝の時雨と山路の暁鐘」(11オ)といつれ

道野辺の入相よりも草まくら／なみた催すむら時雨かな

25 涙をつゝむ思ひと通路を忍ふこゝろといつれ」(11ウ)

袖にてもなみたはつゝむ通路を／忍ふ心はやるかたもなし

26 待宵まつよひの鐘と衣ゝの鳥の音と何れ

衣ゝの鳥の音よりもかなしきは」(12オ)／偽をきくまつ宵の
鐘

27 月の朝と浦の夕といつれ

浦遠く浪間に沈む夕日より／明待空のうすき月影

28 松風と萩のうはかせと何れ」(12ウ)

松の風萩の上かせいかにして／なをし涙の妻と成すらん

29 枕に近き虫の音と鹿の音といつれ

稀に聞鹿の音よりも通夜」(13オ)／人まつ虫そ哀なりけり
30 暁の礎と夜舟漕音といつれ

こかれ行舟の音よりも衣た打／有明や猶淋しかるらん

31 月の夜と雪の明ほのといつれ」(13ウ)

分かたや稀なる雪の明ほのと／あかすのみ見る月のよなく

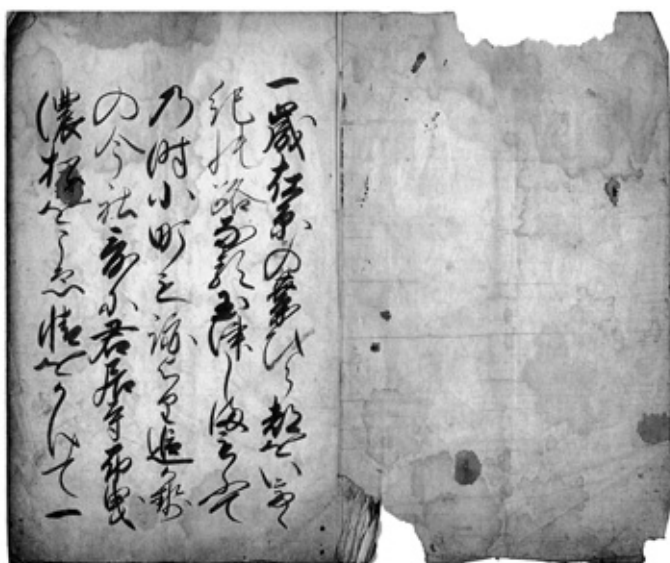
32 田面の雁と雪の衝と何れ

風わたる田面の雁の声よりも／雪の夜すから千鳥啼く声」(14
オ)

歌品問答終」(14ウ)



1 『歌品問答』表紙（第一丁）



2 『歌品問答』第二丁



3 『歌品問答』 第三丁



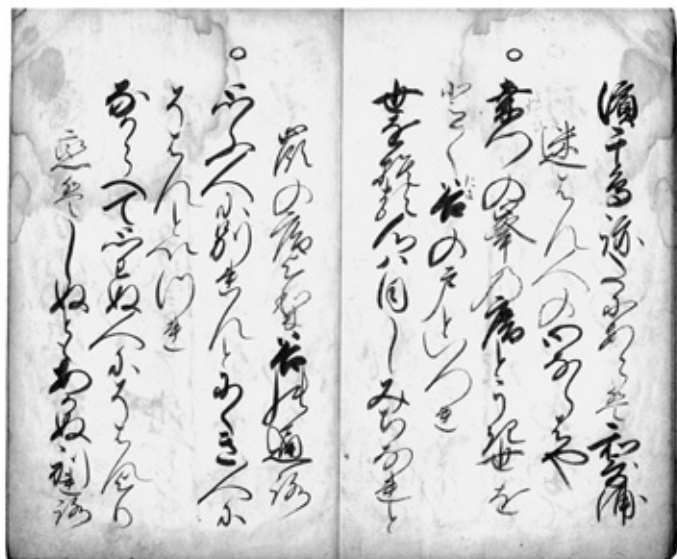
4 『歌品問答』 第四丁

〇 雲をたて舟なり別をた
 ちしるをたて舟なりと
 としりき
 〇 数人の舟にたて舟なり
 〇 老翁の舟にたて舟なり
 〇 老翁の舟にたて舟なり

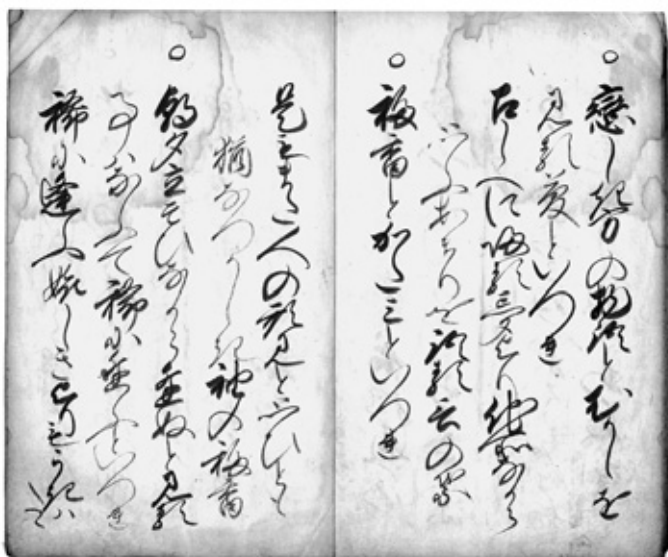
7 『歌品問答』第七丁

〇 雲の舟にたて舟なり
 〇 舟にたて舟なり
 〇 舟にたて舟なり
 〇 舟にたて舟なり
 〇 舟にたて舟なり

8 『歌品問答』第八丁



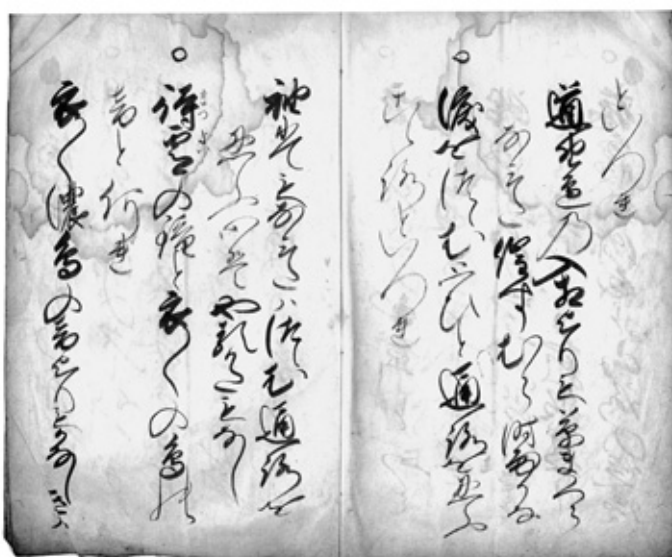
9 『歌品問答』第九丁



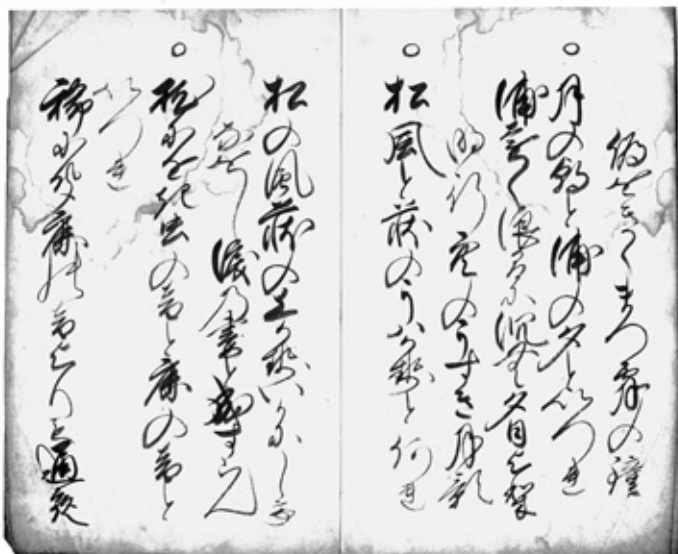
10 『歌品問答』第十丁



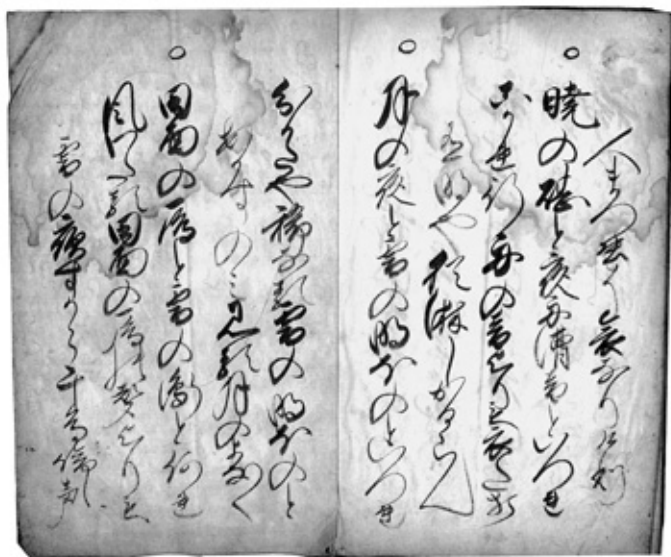
11 『歌品問答』第十一丁



12 『歌品問答』第十二丁



13 『歌品問答』第十三丁



14 『歌品問答』第十四丁

